

## 「講釈師、見てきたような、嘘を言い」—講釈師になれなかった者の研究回顧録

### 「歩くしか能のない教育学研究者」の研究的総括—幻の最終講義ノート

川口幸宏（学習院大学名誉教授）

#### はしがき

2014年3月17日は、ぼくが年度末をもって定年退職するにあたり、最終講義を開いていただくことになっていた（論題「私の宝船 22 年」—その「舞台設定」は自主ゼミメンバーの御奮闘の賜物であった。感謝の念でいっぱいである。）。しかしながら、同年2月19日早朝、脳梗塞に倒れ、即刻入院。最終講義行事をキャンセルしていただくざるを得なかった。そして、そのまま、退職となった。

実は3月2日に、ぼくが欠席のまま、退職と新著『一九世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミュニオン』（幻戯書房）の出版を祝う会を、埼玉大学、和歌山大学そして学習院大学での「学生」を主体として開いていただき、その場で、ぼくの「お礼講演」の原稿を代読していただいている（論題「生活綴方から生活綴方へ～教育研究者としてあえぎながら求めた続けたこと」）。だから、それをもって最終講義とさせていただこうと主観判断をし、今日に至っている。

しかし、セガン関係の新しい仕事（セガン著作「白痴の衛生と教育」1843年発表論文の翻訳）の大方をし終えようとしていた半月ほど前、最終講義用にと、メモをしていた書き物を取り出し、セガンとぼくとはいかなる関係であったのかを振り返っているうちに、最終講義をきちんとしたもの〔文書〕に残しておきたいと思うようになった。

今日、意識としては原題「私の宝船 22 年」に起きながらも、実際にははるかに逸れた内容で出来上がった。お目を汚すことになるが、自己開示にお付き合いいただければ、はなはだ幸いです。

なお、三つの勤務大学それぞれで出会いそれぞれに構築した学生たちとの学習共同体については、特段に別稿が必要であると考えていることを付記しておきたい。

2016年8月1日

## (前座編)

### 東京教育大学在学学生時代のこと

望んでいた学問分野でもなく、とにかく滑り込んだところが「教育学」畑—といっても、  
＜そこ＞しか受験はしていないのだが—。大嫌いな学校教師の養成をもっぱらとするので  
はなく、「教育学」という学問分野を教育し研究するところ。

これは大当たりでした。いや、怠けるのに、ということで。ホラだけは大きく「オレは  
教育学者になる!」、その実態は、教室という閉ざされた空間で権威ある教師からいかめし  
く伝達される情報(学問体系)を鵜呑みにする、という「学びのスタイル」を喜んで放棄し、  
昼に夜に、都会の喧騒の中に姿をくらましてばかりいた。

それでも、授業課題は自学自習でこなし、他人のノートを写すこともなく、カンニング  
ペーパーを持ち込むこともなく、心配なのは出席点だけという状況で単位取得に努めた。  
その結果は落第に次ぐ落第。

たとえば、語学は出席点と教室での発表点と期末試験の合計で換算された。だから一回  
の学期で合格点などとれっこない。「お前、それでよく大学に入れたな。」と語学担当教授  
に、教室で、面罵された次第。反論することだけは一人前、「確かに入れてくださいと  
お願いしたのは事実ですが、入れたのは先生方であってぼくではありません」。この言葉を  
吐いて授業はトンズラ。素直に、頑張ります、と答えれば、かわいいやっちゃっと少しは  
思ってもらえたのだろうけれど……。こうした性分が後のぼくの研究者生活そのものに表  
出されることになるとは、この時には思いもしなかった。この時いただいたニックネーム  
が「語学の天才的落ちこぼれ」。終生ついて回っています。

話は脱線しますが、それ以外は、結構優秀な点をいただいていた。一般教育では社  
会科学系は褒められた成績ではなかったが、自然科学系、人文科学系はそれなりによくで  
きていました。専門科目では、とくに教育学系学問は、最も排斥された教授から、講義・  
演習とも「良」をいただいたことと、恥ずかしながら卒業論文も「良」をいただきました  
が、ほかは「優」。その排斥された教授の学問分野で、しかも一般教育科目であり芳し  
くなかった社会科学・歴史学分野で、ぼくの研究者人生の終期を迎えるとは、皮肉なこと  
ではあります。

・・・ということで、何の問題意識もなく学問分野を選び、何故に、「教育学者になる  
んだ」と大ぼらをこいたかと言えば、他人様、社会の役に立ちたいなどという殊勝な心な  
どまるでなく、そういえばオレはみんなと違うんだぜ、という虚栄心からであったから、  
笑止千万であります。

日常は脚が大学に向かわず都会の喧騒の中をふらつくという生活は相変わらず続く。あたりまえだが、それで心が満たされているわけではない。何かしら、若者らしく「夢」が心の奥にあるようなのだが、それがなんだかはっきりとはつかめない。だからなおさら、徘徊と遊興の世界に入り込む。今となっては、この長年続くぼくの青年期が「精神的親殺し（典型的な立身出世主義、優勝劣敗主義、差別主義の世界観の親の抑圧からの離脱）」の行為であったと総括できるが、当時はわかつくはずはない。ただむかつき、やみくもに徘徊し、遊興する。

こういう日常であっても、非日常として「教育学」的世界探求の欲求がわいてくる。実地踏査を伴う「へき地教育研究」その他地域教育史研究〔学習〕がその表れであった。

「へき地教育研究」は所属学科の同級生はじめ教授たちも、ぼくの本格的な研究課題だとみなし、期待感を持ってくださったようである。…が、この日は、背中をドーンと叩かれた衝撃を覚えた。古書店の片隅にただ一冊置かれていた『小説教育者』を拾い読みした時だ。著者は添田知道。都市部〔東京下谷浅草〕の貧民の子どもたちのための教育に献身した坂本龍之助の伝記である。コピーに「日本のペスタロッチ」とある。版元の玉川大学出版部で同書全巻を買い求め、没入して読んだ。心の中の大きなざわめきを感じた。それと同時に、「日本のペスタロッチ」のコピーが強く迫って来た。玉川大学出版部の書棚に、初学び中のドイツ語で書かれている一冊の書籍があったことを思い出した。それは、背表紙に *Pestalozzi* とあった。数日後、その書籍を求めに玉川大学出版部を訪問し、同書を入手した。生まれて初めての、いわゆる洋書である。当然読む力などない。学校の語学教育には不適應を起こしているの、独学で読み進めるしかない。

ついでながら綴っておきたい。ぼくの学校教育（教室）不適應は、さまざまな申し開きが出来はする、それはともかくとして、独学（非教室的学び）という文化採り入れ学習スタイルが、その後のぼくの学問生活の基本的な方法となる。今日大いに活用しているフランス語の学習も独学一本やりである。それが幸いしたのかしないのかはわからないが、とにもかくにも、そのことによって、誰も赴かなかった世界に足を踏み入れるという野蛮行為がセガン研究を成り立たせた、ということは確かである。どなたかがぼくの弧学という学習スタイルを軽蔑して言った、「お前には常識というものが無いのか！」と。はい、ございません、一人であの辻この辻を巡りますとも。そこでつけられたニックネームが「歩くしか出来ないやつ」・・・。

次第に夢が広がっていった。必ずスイス・チューリッヒに渡り、ペスタロッチの仕事を追いかけるのだ、と。とりあえず、卒業論文作成にペスタロッチ研究を向けていくことを、

内心で決意した。だが・・・

夢と口だけは大きく実践が伴わなければ、芽さえ出ない。それが長く続くぼくの学生時代。70年安保、そして大学闘争、わが身に直接かかわることと言えば「筑波大学闘争」。

東京教育大学「移転」問題から始まった「筑波大学闘争」は、最後には、「東京教育大学を廃学し、筑波大学を新設する」(「筑波大学設置法」という悲劇的結末を迎えたのだけれど、おおよそ、ぼくが東京教育大学に入学した年から埼玉大学に着任するまでの、13年間、ぼくの日常の中にあったことだ。喧々諤々の議論、投石、校内ジグザグデモ、大学当局の非道、機動隊導入…。以下、その前半生活。

ぼくは、その渦中であつたという表現はできない。巷を徘徊し、不良一步手前の中学生たちと「うんこ座り」の中に入り込み〔ほとんどコミュニケーションが成立していないんだ、彼らの会話は、ということをこういう体験から知ることになるのも皮肉なものだが〕、遊技場に寝泊まりしてやーさん見習いたちの行動をしっかりと観察していた〔誘われても「仲間」に入る度胸はなかった〕。

気が向くと大学に赴き、「移転反対！」のシュプレヒコールを上げた。生まれて初めて学生大会に出席しもした。ただし、座った席の周辺は「構造改革派」グループで、「なんだこいつは？」という目で見られたり、盛んに投票オルグをされたりしたが、ぼくは断固、彼らの言う「ミンコロ」の決議案に賛成票。「この裏切り者！」と詰め寄られたが、何のことかわからないほどそっちは音痴。さすがコウカイ派のリーダー、いわく、「川口はどうしようもないアホだから、ほっておけ！」。チンピラ世界にはドスを利かす声を使っても、「学生運動の人たち」には、へらへら戦術しか通用しなかったな。

学部生活 7年間の生活ぶりはこんなありさまで、日常学習は、ドイツ語文献読みだけというありさまだったから、学問的な力など、つくはずもなかった。

## 上田庄三郎研究—「歩くしか能のない教育学研究者」の誕生

夢が虚夢、口がホラであることに気づき、新しい自分なりの可能性、実現性を求め始めるのは、筑波大学闘争の激化と大学院への進学、そして妻となる人との出会いにあり、決定的な道に足を踏み入れるようになるのは、結婚によって授かった新しい命の急性骨髄性白血病の罹病、闘病、そして死、さらにはその過程に寄り添ってくださった実に多くの人々—(ぼくの) 大学院の仲間、(妻の) 大学の仲間、居住地の人々など—の支援、日本作文の会・教育運動史研究会という民間教育運動団体(組織)での学びにあった。それらは確実に、ぼくの世界を支配し抑圧していた「我が母的なもの」からの離脱が進んでいる、と自覚させた。

教育評論家として名高く、それよりも日本共産党の最高幹部の兄弟（（故）上田耕一郎氏、不破哲三＝上田建二郎氏）の父親として名高い、上田庄三郎の知られざる教育実践、教育論の本質を修士論文の研究素材とするようにと、所属研究室〔人文科教育〕の指導教授（国語教育の大御所・倉沢栄吉先生—2015年1月、103歳でご逝去）からご指導をいただいたけれど、何をどうしていいかわからない。大学院同期の日本教育史の秀逸 H 君が、史料調査のために上田家を訪問し、遺品・遺作等を拝見することが必要だ、つぎに上田の出身地高知県土佐清水市に赴き軒並み歩いて、教育実践に関する諸資料の発掘や教え子たちから聞き取りをすることが必要だ、と教えてくれた。前者については彼が同伴してくれ、史料記録の方法（カメラでの記録の撮り方、筆写記録の取り方）等を実践的に教えてくれた。後者はとにかく行くしかなかった。・・・

こうして、ぼくの「歩くしか能のない教育学研究者」の原像が誕生した。まったく研究されてこなかった人物のライフ・ヒストリー追跡と教育実践・教育論の発掘、その評価という研究が、ぼくの今日まで続く教育学研究者としての土台を作ってくれているように思う。上田研究の成果は、上田の生前の知人で社会教育学者三井為友東京都立大学名誉教授（当時、今は故人）との共同編集・解説『上田庄三郎著作集』（全6巻、国土社）としてまとめた。「上田を研究する意義など、どこにあるのか！」という、研究対象そのものに対する厳しい批判を数多く背に受けながらも、彼がへき村の一教師・一学校長として残した足跡の実際、それに基づく神奈川県茅ヶ崎での私学経営、さらに後の教育評論家として発信し続けた「教育とは？」という課題は、押し寄せ来る時代そして社会の荒波に対して、どのようにその本質を保ち続けるかを実践的に提言していると確信する。その提言の核心は「教育活動の中心は子どもである」ということであり、「子どもを教室や社会の中で生かすためには、教師も教室や社会の中で生きなければならない。つまり、生き生きした教育の創造こそが国家社会の任務である」という。そのための教育方法のひとつとして「綴り方教育」を提唱し、推奨した。全教育活動の「窓」とそれを位置づけている。つまり、上田は、わが国の生活綴方教育開拓期の実践家でありイデオログであった。

上田研究をきっかけとして、生活綴方開拓期の人々の教育の事実を掘り起こし再評価するという研究に力を注いだ。こうした初期の研究成果は、後年、単著『生活綴方研究』（白石書店、1980年）にまとめた。「石井賞」（全国大学国語教育学会）受賞作品と言えば聞かえがいいが、同学会がその年度に発表された会員の著作を顕彰するという、いわば新人賞である。日本共産党機関紙『赤旗』の記者が「人」欄に記事にくださった。また、ぼくの研究を温かく厳しい目で見つめ続けてくださっている志摩陽伍先生（当時、東洋大学教授）も『赤旗』紙上の「談話室」欄で、この書を紹介してくださった。

話は戻って、大学院生ではあっても、「生活綴方研究者・川口」としてぼくの名が、多少、知られるようになっていった。しかしそれは、研究室・人文科教育（国語教育）の名を背負うものではなかったし、その名を背負っていたとすれば、「東の川口、西の藤原」という国語教育学界の若手の改革者として語られ、その本質は嫌われ者であった、ということである。ちなみに、「東」というのは東京教育大学を指し、「西」というのは広島大学を指している。両大学それぞれで国語教育を専攻する「無鉄砲な大学院生」が、旧態然たる国語教育学界（直接的には学会）の若手への開放という改革を訴え実現にこぎつけたことから、その名を賜った次第。

### 大学教員生活の出発と混沌

32歳、1976年4月に埼玉大学教育学部に職を得、教育学科に配属された。授業担当科目は主として教育学分野・教育方法学〔生活指導〕。後に、1985年頃から、この身の教育学領域への配置換えという処遇問題が起きはじめた時、カッコ内の「生活指導」は意味を持たず、カッコ外の「教育方法学」だけでの判断と相成り、「生活指導研究者」の実質看板を下ろさざるを得なくなる。が、1976年の着任当時、それまでの国語教育学フィールドからの看板架け替えとあって専門的技量は全く白紙の状態であったから、その第2場だと思えば、天の神様の大きいなをくれたのだらう（「天罰を得た」という自覚はないけれど）。

埼玉大学着任から、生活指導研究者じゃない者が生活指導フィールドで生きていくことを宿命だと思ひなして、自らのほんの少しの体験を生かしたフィールドワーク、生活綴方研究から導き出される生活指導論構築、そして自らの青年期問題（「心的放浪」「徘徊」「逃避」）に重ね合わせた青年期の自立問題の思考、もちろん世にあまたある生活指導論・青年論の学習という日々を送った。心の片隅には、上田庄三郎研究で面白さを知った大正期という時代社会（「近代」）と教育との関係性の研究を探求したいという思いがあったが、目の前の求められる専門性に対応するだけで精いっぱい。だから、この期に刊行した著書、論文の類は、同僚某氏をして言わしめた「まあ、書いたことは書いたな、数はあるわな」という嫌悪感のこもった言葉が本質を表しているだろう。この期のぼくの論理に対して、生活綴方研究でご指導をいただいている志摩陽伍先生が、はしなくも、「日本刀の鋭い切れ味はない」と評してくださっている（『子どもが生きる教育の創造』教育史料出版会、1982年、に対する先生の言及）。スパッと切る論理ではなく、これでもかこれでもかと、たたっ切るといふ、およそ明晰な倫理とは別物だ、という意味だ。その通りだと思う。それでも志摩先生はぼくを期待すべき若手の研究者の一人として認め

てくださっていた。

世評ではある程度名が知られ、著書サインセールなどもなされ、テレビ・ラジオの出演や番組作成への関与などもした。いろいろな研究会の「助言者」や「研究協力者」を請われて応じもした。そうした中で、現実から学ぶ得る生活指導の課題は数多くあったが、感性レベルの認識に終わっていたと、今は総括できる。

その後に長く続く「研究空白」期の招来を加速させたのが、先に触れた教育工学を利用した教育現象研究機関（教育学部附属教育実践研究指導センター）への配置換えであったし（身分は助教授のまま。これは、一般的に降格人事だとみなされた。だから、世間的な評判は、川口は何か悪さをしたのだろう、ということであった）、第4子の無顆粒球症罹病、闘病そして死という家庭問題であったし、こういう状況にあっても一応自立しているとみなされている研究領域（生活指導関係研究会、学会）における責任ある立場の遂行の重さであった。

このような日常の中のある時、緊張の糸が音をたてて切れるのを覚えた。ある学会の席で、ぼくの第4子の死を知った今でいう臨床心理畑の某氏が、「子どもさん亡くなったんだってね、これでお二人失くしてしまっただね、よく生きていられるね、ぼくだったらだめだな。」と、＜慰めの声＞を掛けてきた時だ。「子どもをどんな形にせよ亡くした親は、自分は子どもを殺してしまったと、生涯、自分を責めて苦しむ」という心理的状况を自らに被せていたぼくは、某氏によってはっきりと子殺しを宣告されたと同じ心境に陥った。その某氏は、決してこの事実があったことも、その事実がなされた光景の寸部も、現在ご記憶には無いだろう。

苦しみから逃れるためにも、これまでかかわってきたほとんどすべての研究組織から足を遠ざけた。その一方で、これまでの自分がない、いろいろと、研究というか、求められる職能らしきこと—コンピュータ利活用の教育開発—を手掛けてはみた。しかし、魂が乗り移らないままに、時が過ぎていく。

一方で、うつ症状に襲われ、日に日に崩れいくぼくの心のありようを心配し、寄り添ってくださる若き友人たち—ゼミの仲間【教え子】たちがいるという事実の尊さは、終生忘れることは無い。浦和・大久保キャンパスの4階にある研究室の窓外の景色がさまざまにデフォルメされた光景としてわが身に迫ってくる心理深層の中で、若き友人たちが、片時も傍を離れずぼくと言葉を交わしてくれた。その日時はつらく長く感じたが、デフォルメ光景を事実光景に戻してくれる力を蓄えてくれたのだった。

「生活指導」の世界で自己完結する情熱も意欲も喪失し、新しい課題を自己開拓する力量もないぼくに、手を差しのばして下さったのは、さきにふれた 志摩陽伍先生だった。

ぼくの生活綴方研究の初期の頃からの厳しい批判者であり援助者である。「アメリカなど英語圏に Whole Language という新しい教育運動がある。日本の生活綴方と手を携えることの可能性がある。その日本の窓口になって欲しい。」と。それとは別のルートで、ぼくの大学院時代の所属研究室の一つの、しかし大きな研究動向として、Whole Language 研究が手がけられていることを知った。こちらは倉沢栄吉先生が戦後我が国の国語教育に導入された単元学習からのアプローチ。旧の住屋に対抗すると受け止められようが、我が道を行くしかない。

手始めに、埼玉大学勤務終期に、大学院生や研究仲間数人と Whole Language の立場からなした生活綴方研究書の翻訳研究会を立ち上げた。成果は、この分野の入門書の翻訳出版（ケネス S・グッドマン原著川口幸宏訳『教育への新しい挑戦—英語圏における全体言語教育—』大空社、1990年）、また、メアリ&チサト・キタガワ原著川口幸宏他監訳『書くことによる教育の創造—アメリカ人による生活綴方教育の研究』（大空社、1991年）との表題のもとで翻訳出版をした。訳文を含めてあまり評判はよくない。未熟さを露わにした作業だったからだ。出版されたのは、いずれも、1989年10月に、和歌山大学教育学部に新たな職場を得て以降になる。

さらに、人的研究的交流が必要だという志摩先生のご提案で、巨大な大陸アメリカ合衆国にわたり、関係学会に出席しやさやかな報告をしたり、関係者のサークル研究会に出席したり、あるいは日本語教育のクラスで日本の生活綴方を語ったりと、それなりの活動はした。しかし、「語学の天才的落ちこぼれ」と揶揄される者が歩むことができる道かどうか、不安ばかりが先にあったことは間違いない。アメリカに住む日本人言語学者と Whole Language 実践家のご夫妻に手を引かれ、合衆国のいくつかの地を歩いたが、頭の中に住み着いたどす黒い霞は、ついぞ、晴れる思いをすることはなかった。そして、2001年9月11日、そう、例の日と西海岸ではあったが遭遇した。半旗の星条旗、星条旗をたなびかせて疾走する暴走車等々。アメリカ社会の失意に沈む姿と狂気の牙をむき出しにする姿をこの目に収め、非常に落ち着かないわが身を覚えながら、やっとの思いをして帰国することができたが、それ以来、海を渡って東に進むことはしてない。ただし、新たな我が身内家族の住む国ジャマイカ共和国に向かう時にはやむなく通過しはするが、降り立ちたいと思うことは、一度もない。

アメリカ生活でこの目に直接収めたこと—極端なまでの優勝劣敗社会に生きることに呻吟するドロップアウト層の居住区、また、ネイティヴアメリカンの文化、その居住区のままに貧困と退廃の生活に包まれた子どもたちの実相、そしてその中で、人間的な生活を豊かに保障したいと教育実践と教育研究とに打ち込む多くの教師たち。それらとの



濃密なふれあいは、確かに、ぼくの中に新しい何かを産み出す予感を得させたが、その方向性をしっかりと見定めることはできなかった。なお、この課題意識は、学習院大学に職場を変えて後に上梓した『新教育学講義』（川口幸宏編著、八千代出版、1995年）で触れておいた。

ところで、1989年10月に和歌山大学に職場を移したが、そこで用意される職能は、やはり附属教育実践研究指導センター立ち上げの後はその機関の専任教員であった。機関が正式に発足したのは1991年4月1日、この日を以て教育学科の助教授から附属教育実践研究指導センター所属助教授となった。同時に、教育学部教授会によって兼任のセンター長に選出された。ただし、事務系職員も技官もない、もう一人の専任教員は未採用であった。埼玉大学時代と違ってはすでに機関のハード設計がされていたので、ぼくの当面の役目は、機関のソフト設計とその実施にあった。環境的厚遇を得（専用の研究室のほか、学部長室並みのセンター長室）、学生指導のための専攻の設置（教育実践学専攻）等々、和歌山大学が同センター発足に大きな期待を寄せており、ぼく自身にも強い期待が寄せられていることを感じる事ができた。だが、正直に言えば、ぼく自身の専門的研究として教育工学的手法を駆使する見通しと自信と決意は未成熟であった。幸いなことに、自由闊達な学びを求めているゼミ生たちと出会うことができ、優れた研究や学生指導を進めておられる同僚たちとの楽しい語らいに恵まれた。教育工学的手法を導入した教育実践研究への本格的な没入に自己嫌悪に陥ることは無かった。ただ、生活綴方的リアリズム（ぼくが持ち続けた研究方法のコア）をどのように生かすか、という課題に対する「回答」を得ることは、困難であった。

ところで、毎日を精神的死と向かい合って過ごしていた埼玉大学勤務から、とにかく精神的生の可能性を求めて和歌山大学に飛び出していた時には、深く考えることができなかつた重要な問題と直面し始めたのが1990年の始め頃である。それは、わが家族は別居家族（妻子が関東圏生活、ぼくが関西圏生活）で生きていくことになるのか、それとも家族が合体し一つの生活台で暮らすのか、という問題である。後者の場合にはぼくが和歌山大学の職を辞すという可能性などみじんも心のなかになく、和歌山県内に家族揃って移住することしか考えなかつた。この点、進歩的研究者と自他ともに称していても、ぼくは、きわめて保守的でエゴイスティックな男性でしかなかつたわけである。こうした家族分離は、思春期の子どもの精神に強い矛盾として反映される。そして子どもは意識することなく、自分の心を責め始め、身体に現し始める。妻からSOSの電話が入る。それなりに対応を図ろうとするけれど、それは本質的な解決にはつながらない。

家族問題で悶々と過ごしていたその年の初夏、学習院大学教職課程から、可能ならば教

授職で迎えたい、担当科目は教員免許用科目の教育原理、特別活動の研究その他、自由な研究活動の保証などが伝えられた。倉沢栄吉先生や生活綴方研究でご指導いただいた滑川道夫先生がこの情報を耳にされ、「ぜひ戻って来い、戦前生活綴方史研究を完成しなさい」と助言してくださった。ああ、ぼくには「帰る故郷があるのだなあ」と思うと、涙がこぼれ出た。

こうして1992年4月1日から学習院大学教職課程に籍を置くことになった（なお、文学部に「教育学科」が設置された2013年4月1日から退職の日までは「教育学科」に所属した）。退職までの22年間、中高教員養成を担い続けたけれど、結論を先に言うと、倉沢、滑川先生からご指導いただいた「戦前生活綴方史研究の完成」には至ることが出来なかったけれど、新たな研究課題と向き合い、「日本刀の鋭い切れ味」ならぬ「生活綴方的リアリズム」を、十二分に発揮することができたと自己評価している。それすなわち、「歩くしか能のない教育学研究者」像の誇り高き構築である。

## [「私の宝船22年」編]

### 「うゝあがぼん漂流」研究者人生の出発

ぼくが研究者としての心境と行動とをエッセイ風にして公開日記に綴り始めた表題が「うゝあがぼん漂流記」。教室の椅子に体を固定させて皆と一緒に暮らすよりも、大空の下で、時に土砂降りの雨に打たれながら、一人で暮らす「放浪」的な生き方が気性に合っている。

時は進んで、2000年4月1日、ぼくはフランス・パリで1年間の自主研修の生活を始めるため、シャルル・ド・ゴール空港に降り立った。

学習院大学の今の長期研修システムからは考えられないほどの自由性、具体的で詳細な研究課題と方法とを持たぬまま、ぶらっと、「自由な国」フランスにやってきた、フランスのすべてについて、そうフランス語を含めて、ほとんど教養を持たない、一人の「うゝあがぼん」いや「バカボン」。絵画・音楽等にも興味を持たず（興味を持つフリさえできず）、華美で豪華な建築物（内装含む）にも全く関心を抱かず〔足すら向けず〕、植民地時代の略奪品展示にも興味を示さず〔内庭の石畳に魅了されて、ピラミッドゲートを目の端に止めるところまでは赴くが〕、有名どころの遊覧にも腰を挙げず（セーヌ川の濁りはどうしてなのだろう、という問いを持ち、調べるというところに関心が向けられはするが）、いったい何をしにお前はここに来たの？とアパートの大家さんに聞かれ、さあ？と自らにも

こういう対応をするような、当時、年齢は 57 歳であった。

日課とすることは、晴れの日には、電子辞書を忍ばせたバッグを持ってアパートを出、気分次第で辻を曲がり、気が向いた公園でパン・オー・ショコラを頬張りながら、道行く人、道で働く人、その公園を取り囲む建物、広告などを観察し、教育にかかわるらしきことがあればメモを取る。生活綴方史研究で出会った「通行する者の研究」という秋田の教師滑川道夫指導の児童作品さながらであり、滑川がこの実践の方法論を考現学から得た、と書いていることの再現のようでもあった。

そうして 2 時間ほどを過ごした後は街中散歩。意識して地図を持たずにアパートを出ているため、自分がいるところとアパートとの距離、方向感覚はぼくの脚と頭が記憶していることだけが頼りなのだが、各道の名前の簡単ないわれが書かれたプレートを読んで「歴史」学習をする。というのも、パリの道は大かたが人名や歴史事象名であるからだ。その道に誰がそんな名前を付けたのか、そのいわれは何なのか、そういう疑問も当然わいてくるので、いろいろな人に尋ねるが、ほとんどは知らないという返事。独力で調べるほどにはその方法論も教養も有していないので、ほとんどがそのままあきらめて過ごす。晩秋に、パリ・コミュニケーション [1871] の聞き取りのために、「パリ・コミュニケーション友の会」事務所を訪ねた時、その問題はある程度、解答を見つけることができた。いずれにしても我が日本の学校歴史教育内容とはほとんど無縁の情報であった。が、後にぼくの疑問を解く入り口となる。そして、帰路に就く。古書店とスーパーに寄り道し、めぼしいものを購入。アパートに帰ってすることは、購入素材のいろいろな調理と消化。間違いなく、この身は、漂流者 *vagabond*。これで道行く人に金品を請求すれば、パリ名物「物乞い」となる。こうして、この道において、すっかりパリに溶け込んでいった。

長期研修の届け出テーマは「フレネ教育研究」。1996 年にフランス国立「フレネ学校」の校長と教師とが日本フレネ教育研究会に招かれて来日した折、その講演を聞いて以来、ほぼ隔年、フランスを訪れ、フレネ教育の実際をこの目に収めるようになっていた。その教育方法に生活綴方と共通するものを見出したと思ったからである。

2000 年 8 月中下旬、国際的なフレネ教育研究団体の研究会がフランス西海岸地方のレンヌで開催された。それへの参加によってフレネ学校以外のフレネ教育関係者と知己を得、同年 9 月以降、マルセイユ市の公立「ヴォンヌベヌ・ペダゴジー・フレネ小学校」、その近郊の小さな公立「シレスト小学校」内のフレネ教育を実践している低学年クラス、パリ 13 区内公立「マリア通り小学校」内高学年クラス、そして前述のニース近郊の国立「フレネ学校」、それぞれ 2 週間を 1 セットとして、参観を繰り返した。また、いろいろな立場からフレネ教育を進めている教師の月例研究会に参加させてもらった。

おおよそ半年かけたこれらの乱雑な「学びの成果」は、「市民的資質」形成を主題とした小論「フレネ教育は *contrat* と *direction* によって成り立つ」というタイトルの冊子にまとめて、ぼくの海外研修の果実の一つとした。（日本フレネ教育研究会会報の 2001 年、2002 年の号に分割して掲載された）。これらの活動は、1999 年に八千代出版から編著として公刊した『モラル・エデュケーションー市民的資質形成のために』のぼくなりの実証的研究であった。

2000 年度のサバティカルのあと一つの成果は、パリ独歩から偶然見出した、いわゆる「パリ・コミュニケーション」関係史料の収集と学習・研究も、研修報告として論文にまとめた事柄である（「la Commune de Paris 1871 における近代公教育三原則の成立に関する研究」、『学習院大学文学部研究年報』第 48 輯、第 49 輯）。こちらは事前にテーマ提出をしていないから、まさに自主研修。フレネ教育の方は帰国後ほんの少し学習を進めただけである。日本で言うフレネ教育とぼくがフランスで参観したフレネ教育とはかなりの懸隔があり、日本にいてはその実際的研究は不可能であるため、継続研究は断念することになったのだが、パリ・コミュニケーション研究は、史資料収集と研究とを継続し、その中間発表的なことを『一九世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミュニケーション』（幻戯書房、2014 年）第二部にまとめたし、今もなお考え事の中に住み着いている。ぼくの研究者生活の中に突如現れた感は否めないだろうが、上田庄三郎研究で興味を強く持ったものの課題として残さざるを得なかった、「近代」についての興味の広がりや深まりの結実過程に位置付けている。

1 年間のフランス・パリ「うゝあがぼん漂流」は、ぼくを、何よりもまず、人間として「再生」してくれたし、問題関心は古いが、実質内容は新しい課題を探求し続けるという意欲をわき起こしてくれた。

### 本格的な「うゝあがぼん漂流」研究者人生の開始

ぼくの研究的世界観には全く存在していなかった知的障害教育史とのつながりが始まったのが 2003 年早春。いや、訂正しよう、知的障害教育史とのつながりではなく、「オネジム＝エドゥアール・セガン」という人物とのつながり、と。

知人がご夫妻で「清水寛先生と行く『エミール』・セガン・21 世紀平和への旅」に行くが、ぜひ一緒に行きましょう、とお誘いくださったことがきっかけだ。ご夫妻はご都合事が生じ取りやめとなったが、ぼくは「旅」に参加することを決め、申し込みをした。

それから 1 か月後のこと、清水氏から拙宅に電話が入った。お声を拝聴するのは埼玉大学の同僚として教授会でのご発言を耳にして以来のことだから、じつに 20 年近く経っていた。

「(川口は) どこでどうしていたやら」という切り出しの氏の電話は 1 時間近く続いた。趣旨は次のようであった。定年退職の記念としてセガン研究をまとめた本の出版企画があるが、セガンのフランス時代については口伝はあるが、史料的に確認とれないことが多い、については史料調査の協力を得られないか、と。

この日から、ぼくの頭の真ん中に「セガン」というキーワードがドカンと座った。しかし、体は日本にあるわけで、頼りとするのはインターネットと日本の図書館ぐらいなもの。ヴィクトル・ユゴーとセガンとは同じ文学同人同士だったらしい、その同人誌名を探せ、とか、セガンが初めて教えて知的障害教育に成功したアドリアンという子どもの出自、家族関係を明らかにする手がかりをつかめ、とか、セガンが白痴の子どもたちを預かり養育し教育をするために文学などを書いて資金を稼いだそうだが、その文学作品を見つけ出してほしい、とか。

「セガン研究 40 年」を公言されるお方が今なお不明なことって、座学で、しかも日本で、できるわけではない。しかし身は宮仕え、親からゆずり受けた金銀財宝等の処分可能財産は全くないから退職してパリに体を構えることなどできはしない。ご依頼？を受けた際に、無理です、とはすぐに返答したけれど、寝ても覚めても気持ち悪いほど、「セガンさんって、何者？」を問い、つついインターネットをフランス国立図書館等にもつないで、データ検索をする毎日が続いた。

清水氏からのご依頼事は、当然のことながら、何も明らかにならない。その代わりに、氏らが 1960 年代から進めてこられたセガン研究には、いくつかの瑕疵があると確信した。それが大きなことなのか小さなことなのか、瑕疵を糺せば意味あるセガン像が形成されるのか、知的障害教育史に意味があるのか、いやもっと大きく、フランス近代教育史として成り立ちうるのか、ぼくのこれまでのフランスにかかわる研究と重なり合うのか、そういう問いを持ち始めたのが、清水寛氏の退職記念出版物・清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』(全 4 巻、日本図書センター、2004 年)の編集実務に携わり、拙文・訳文等を寄稿することを通してであった(2003 年秋口から 2004 年 2 月ごろまで)。なお、ぼくが同書にさまざまに寄稿したのはすべて清水氏による「ご下命」であって自発的に課題を探究した成果ではない。当然、急ごしらえのものばかりであり、寝食を惜しみ、かつ職場の諸激務を同時並行させて成し遂げたという感慨はあるものの、傷だらけの安普請には変わりはない。今では、「墨塗り」にしたい気持ちが強くある。当然、業績目録には一言一句たりとも加えない。

清水寛氏の退職記念編著書の出版が無事終了し、清水氏と同編著書に対して、日本社会事業史学会から社会事業史文献資料賞が授与され、それを祝う会が 2005 年 7 月 2 日に開催

された。清水氏のたつての願いで、学習院大学(文学部大会議室)でそれは開催された。

会には 100 人近くの出席者があり、何故か、摩訶不思議な盛会だと感じた。清水氏が構築された研究的人脈の強さを痛感したからであろうか。それよりも驚かされたことは、清水氏が会に先立って、ぼくに「セガン研究のこれまでとこれから」を報告せよ、と命じたことであり、さらにその執筆過程の中で「あなたはセガンを否定的に見る」と激怒されたことだ。ぼく自身はセガンを否定的に見ているつもりはみじんもなく、父親との相克があったかもしれない、と原案に記しただけなのだが、「近代」の象徴としての自立問題を扱うことをもって「否定的に見る」という清水氏のセガン観とはいったい何なのだろう。

この祝う会をもって、ぼくの頭の中から「セガン」の文字を一括消去しても誰も困らない、ぼくも困らない、すべてハッピーで閉めることができたはずなのだが、清水氏が、2012 年がセガン生誕 200 周年に当たる、それまではわが国でセガン研究を進めていき、国際的な水準を持つにいたるよう鋭意研究を進めていきたい、と公言された。あろうことか、ぼくがその組織的中心を務めるように、とのご指名だ。乗り掛かった舟、これまでのセガン研究の瑕疵を改め、あたらなセガン像が構築されることを願って、「セガン」を今一度、頭を中心に位置づけることにした。ところが現実の清水氏は、この 2 か月先、セガン研究の梯子からご自身は降り、別の研究にいのちをかけると、宣言なされた……。

毎年、夏休みあるいは秋の大学祭の時期、あるいは 3 月新学期開始前などを利用して、フランスを訪問し、セガンの生育にかかわる原史料を求め、セガンの社会運動にかかわる諸史資料を求め、セガンの知的障害教育の制度面実践面にかかわる各種史料を求め、歩いた。それらの分析を通じて、少なくとも、セガンのフランス時代にかかわる先行研究は信憑性に劣るという立場を築き、HP にその成果〔中間報告〕を発表していった。それだけではなく、コンピュータ操作等を一切なさらぬ清水氏のために、すべてプリントアウトし、お目に掛けた。清水氏のそれに対する評価はなかなかご同意いただくレベルには到達せず、むしろ対立点が多くなり溝が深まっていくという感があった。

ところで、2008 年、当時、神奈川の養護学校に勤務し日本の病弱教育史の研究を長年進めておられる桐山直人氏（現、県立特別支援学校長）から連絡が入り、「日本育療学会小規模研修会でセガンのフランス時代について、知的障害教育と病弱教育との接点という論理を含めて話さないか」というお勧めをいただいた。当時、セガン関係の原著を精力的に翻訳紹介しておられた中野善達氏(故人)が論稿「イタルの『アヴェロン』の野生児』の教育実践とセガン」（清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流』前掲、第 1 巻）で断定的に綴っておられる記述を斟酌し、セガンの白痴教育は病弱児教育とリンクしていた、との仮説を立て、ささやかな論稿に綴っていた。この仮説に対しては、その頃〔2008 年頃〕

に為していたフィールドワーク成果の分析的研究によって、実証されえない論であることが、後に判明されることになるのだが。このことについては後に触れることになる。

育療学会での報告が、ぼくのセガン研究を社会に開かせる第一歩となったわけである。いうまでもなく、2005 年以来進めてきた実地調査の結果を史料を添えて報告した。学会発表で、強い関心を持っていただいたのは、研究者生活で初めてと言っていいほどの、インパクトのある研究会だった。同学会のある有力会員が「セガン研究史の研究が必要だと感じた」という感想を発言されたのが印象に残っている。

ぼくのセガン研究に興味・関心を抱いてくださった研究組織は、後にも先にも、この日本育療学会だけである。日本育療学会編集『子どもの心身の健康問題を考える学会誌 育療』第 50 号（2011 年 3 月）「「イディオの教師」の誕生とその意義」、同第 54 号（2013 年 3 月）「特別寄稿 知的障害教育の開拓者セガン案内—先人の業績を検証するための一助として」の寄稿を求められた。学会へのこれらの寄稿論文は加筆修正し、再構成の上、前掲書『一九世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コムニオン』の第一部（セガン論）の主軸という扱いにした。この二つの論稿は、セガンがフランスで活躍した知的障害教育の足跡を制度組織面から原史料に基づいて明らかにしたものである。これより先に刊行した『知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究』（新日本出版社、2010 年）の第 3 章をさらに史料的に補完し、少しの記述訂正を施し、さらにテーマを焦点化して論じたものである。だが、知的障害教育史プロパーからは全くリアクションがなされなかった。それまでなされてきた知的障害教育史に対する、根源的な批判であったにもかかわらず、だ。綴られている意味内容さえ把握できないのだろうか、と、強い疑念を持った次第である。ただし、後年、藤井力夫氏が全国障害者問題研究会編『障害者問題研究』第 43 巻第 4 号（2016 年 2 月 25 日号）において、ぼくのセガン研究書 2 冊併せて書評をしてくださっていることは、特記しておこう。ぼくに言わせれば、史実に忠実に、セガンの実践・理論に忠実に、セガン研究を進めてこられたくただ一人の方である。本「最終講義ノート」の末尾に、[附]として、全文再録させていただいた。

このようなことに象徴されているように、日本育療学会において少し着目がなされることがあったとはいっても、清水氏の高らかな宣言にもかかわらず、わが国のセガン研究は決してもろもろの人が結集するような性格のものではなかった—清水氏の御自身のセガン研究終結宣言にそれは象徴されているのだろう。ぼくのところにじかに聞こえてくる声は、「セガンはもう終わった」であったり、「何を今さらセガンか？」であったりした。どのように先行研究の瑕疵を糺そうとしても、「それはもうどうでもいいこと」なのだ。セガンが歴史に残した「知的障害者は教育が可能である」ことと、「知的障害教育の内容と方法の

本質は確かであり、科学的にも検証されうる」こととは、揺らぐことのないセガン評なのだ。こういう時に、「歩くしか能のない教育学研究者」が悪罵でもなく虚偽でもない、事実評価として、ぼくに覆いかぶさってくる。

2005 年頃から見舞われていた心身の不調は、さらに強まってきた。動悸、息切れ、めまい、過呼吸、吐血、...それこそ精神的抑圧からくるありとあらゆる身体不調に見舞われた。埼玉大学時代終期に襲われたうつ症状への対応は、医師による治療もさることながら、どんなに無責任だと罵倒されようとも、自身の命を支えるために、「いやになったらやめる」をモットーとして生きてきた。だから、サッサとセガン研究の梯子を降りればいいものを、降りようにも梯子を外されて屋根に取り残されているという精神状況。せめて、誰も結集することのない日本セガン研究会の事務局の荷を負わされている事実だけはぼくの身から外したいと決意し、清水氏に「日本セガン研究会の活動休止」を願い出た。ご同意をいただき、2012 年のセガン生誕 200 周年の前年まで、事務局仕事から一切解放された。

皮肉なことに、研究会の休止中こそが、ぼくのセガン研究の大きなピークを迎えることになる。要は、先行研究を意識せず、自身の問題意識と方法とで、セガンを読み解く、という立場に立ち切ることができるようになった、ということなのだろう。問題意識とは、19 世紀を生きた一人の偉人の「自分探し」(＝自立)を問うことであった。

これについては、少し説明が必要であろう。

果たして先行研究が綴るところのセガンの生育史が、「19 世紀前半期のヨーロッパ、とりわけフランスの片田舎に生まれ育ち生きた人、しかもブルジョアジー子弟の自己成長・自己発達を説明しているのだろうか」と、ぼくは疑念を強く持った。ありていに言えば、近代以降とりわけ男子の育ちの過程で強く発現するようになったと言われる「自立期」がセガンにはなかったのか、ということ。それともう一つ、いやとくにこだわりを強く持ったのは、セガンによってまとまった形で語られていない彼の育ち環境の実態である。少なくともぼくが読みかじった文学(「感情教育」など)に描かれている、19 世紀を舞台としたフランス社会、とりわけ 19 世紀中期のそれからは、はるかに隔たったところにいるセガン生育史しか、先行研究書からは浮かび上がってこない。

先行研究をよくよく読むと、いわゆる「第一次史料」を使用しているものは皆無である。セガンの言説を引用しているものも、それを批判読みはしていない。批判読みをするに必要な歴史的資料・史料を活用していない。そして、気づいた。先行研究者が抱いている人間の成長・発達のモデル・ケースにセガンをあてはめているだけで、歴史的実在者としてのセガンを綴っていないのだ、と。このことの実際を、3 人のセガン研究開拓者であり、かつセガン研究のリードオフメンの綴文に見てみよう。



まず清水寛氏は、「郷里クラムシーの町があるフランス南部のブルゴーニュ地方の、少なくともセガン家のような中流・上流階級の市民の間では、『エミール』に示された教育思潮が家庭や幼稚園での教育に一定の影響を及ぼしていた」（清水寛「ルソー『エミール』の自然主義教育の思想とセガンの生理学的教育」、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』全 4 巻（大空社、2004 年）の内、第 1 巻所収論文）と言う。セガンの「回想もどき」を絶対資料として論述しているわけだが、ところが、セガンの乳幼児期には幼稚園などまだこの人間世界に誕生していない。

また、我が国のセガン研究の先駆者のお一人松矢勝宏氏は「セガンは父ジャックのリベラルな養育方針によって幸福な幼・少年期を送った。」（松矢勝宏「『セガン教育論』について」、大井清吉・松矢勝宏訳『イタル・セガン教育論』世界教育学選集 100、明治図書、1983 年）との評価がなされた。『エミール』に倣ってされる子育ては幸福な期を過ごさせる、というのか。松矢氏はこの記述に先だつ 1980 年、セガン生誕の地クラムシーを訪問された時の感慨を、「セガンは理想の（知的障害者のための—引用者挿入）施設をどのような情景として、頭の中に描いていたのか、私はセガンの生まれ故郷クラムシーの自然的環境ではないかと考えます。」と述べ、「原体験」そのものの再生との意味づけとして捉えておられた（社会福祉法人・滝乃川学園編集・発行『矢川だより』第 52 号、1997 年 8 月）。まさに『エミール』に適うクラムシーという理解なのだが、セガンの乳幼児期、つまり 19 世紀初頭期に『エミール』がどれほど実際の子育ての「テキスト」とされていたかについての検証はなにもなされていない。史実としては『エミール』が識字市民の手に取られる大方の傾向は、19 世紀半ば以降でしかないのだ。

同じくセガン研究の先駆者のお一人であり、現在もおセガン生育史関係論文を発信しておられ、生育史研究は重要であるという立場をとっておられる津曲裕次氏は、「（セガンは）時代の児として、生活の中で実物と経験を通して教育されたのだった。長ずるに従って、科学に目覚め、社会に関心を持つに至った根源が、この時代の彼の教育にあったようにも思われる。」（津曲裕次「『白痴の使徒』エドワード・セガンの生涯」奈良教育大学紀要、1986 年）と言う。果たして「時代の児」セガンは、本当に、「生活の中で実物と経験を通して教育された」のか。そもそも、時代の子育て一般がそうであり、セガンもそのように育てられた、という論が実証的に成立しうるのか。

これら御三方は、セガンがアメリカ時代に振り返った形で綴っている『教育に関する報告（1875 年著書）』の一節に依拠して論を張っておられるが、その一方でセガンが、フランス時代の論文・著書（1843 年「白痴の衛生と教育」、1846 年『白痴などの精神療法、衛生ならびに教育』のそれぞれ）に綴ったその時代社会の子育ての実態を、無批判で、それはよく

よく読むとセガン自身の生育環境を一般的な姿として紹介していることについては、まったく触れておられない。要は、御三方とも、セガンの論述の都合のいいところだけをつまみ食いし、クリティーク作業を怠っておられる、ということに尽きるのである。

「なんだ、各研究者は、セガンを利用しているだけで、セガンそのものを研究してないんだ。」と。ようやく、セガン研究の入り口に立った思いがした。2008年秋のことである。

### 「うゝあがぼん漂流」研究者人生の終着へ

もう「セガン神話」とでも形容するしかないような、フランス時代のセガン像がなぜ語られ続けてきたのか、その源はどこにあるのか。

「セガン研究 40年」を公言なさるセガン研究者がよく口にされたのは、「白痴は人間ではないとされそのような扱いを受けていた時代に、セガンは、白痴も人間だ、教育を受ける権利を有している、と言っている。」ということばである。この一文の前半(「…時代に」まで)を共通認識するとして、「セガンは」以降の記述の検証は必要であろう。

確かにセガンは、「万人の教育を受ける権利」を主張する社会運動を進める一員であった[サン・シモン主義者、秘密結社「四季協会」メンバー]。ただし「万人」の中に「白痴」を含んで理解している、という前提が必要ではある。だから、そのことの検討は欠くことができない。つまり、以下の史実をどう理解して、「万人」の意味するところを承知するか、ということである。

まず、ルソー『エミール』は自然主義教育の源とされるが、その教育対象は、今日の目からすると「子どもすべて」ではない、「人間すべて」ではない、健康な男児のみであって、病弱者や障害者や老人や女性は、ルソーの言う「人間」の埒外に置かれていたではないか。とりわけ『エミール』に綴られた女性論は、その著書の1/3を占めるほどに割り当てられて論じられてさえている。本書公刊後ただちに、女子教育の必要がブルジョアジーによって高唱されるほど、大きな影響を与えている。

また、フランス革命は「人間の権利」を高らかに主張しているとされるけれど、事実史としては、女性に市民権を与えず、あまつさえ、ルソー主義者のロベスピエール主導の下、男性と同等の政治活動・社会活動をする者、つまり旧来の「男性社会」に足を踏み込む女性の首をギロチンではねている。それでもフランス革命を「人間と市民の権利」の樹立宣言であったとしているが、本当のところは、「男性と男性市民の権利宣言」であった。

さらに、流浪者・障害者・病弱者・高齢者などの社会的弱者は、「救済院」「施療院」「教育施設」という四周を高い塀で囲い込んだ施設(監獄)の中に閉じ込め(「貧者」の強制収容)、「生かす」ことはしたが「活かす」ことはしていない。いや、それらの劣悪なる

環境という事実を考えれば、「生かす」ことすら積極的に担おうとしたとは、到底考えられない。この傾向は、少なくとも 19 世紀半ばまで堅持されており、「監獄・救済院」の制度改革が進められ始めるのはそれ以降である。つまり、セガンが知的障害教育を開拓したのは、「監獄・救済院」時代であった。

そういう 19 世紀近代初期のフランス社会の中で、地方小都市の監獄医を務める医学博士を父親に持って生まれ育ち、生きたセガンが、一足飛びに「現代」に分け入るような哲学を、本当に持っていたのだろうか。こういう目で、セガンの著作を丹念に読んでみると、次の文言（要旨）が目にも強烈に焼き付いた。

「盲者は点字、聴覚障害者は発話法を得たことによって、人間になったのである。(要旨)」  
 C'est ainsi que l'on a remplacé l'ouïe par le regard, le regard par le tact, la parole par la mimique; en un mot, les aveugles-nés et les sourds-muets sont devenus des hommes.」（セガン「白痴の衛生と教育」1843 年。下線は川口。なお本稿は、本年（2016 年）に『草稿 知的障害教育論／白痴の衛生と教育』として訳出出版をした。版元は、幻戯書房。）

この論文の発表時期 1843 年は「監獄・救済院」改革以前の時期である。「人間だから権利としての教育をした」のではなく、「教育によって人間になりうるかどうか=社会化しうるか」という問いのもとで、知的障害教育を進めたのだ。ここで言う「教育」とは、セガンに即して言えば、フランス社会に同化できる一労働力を社会に提供することができる一ようにする営みのことである。そして、こういう問いは、精神医学者の間で問われ、セガンより 10 余年早く、「白痴は読み書き教育によって知的に発達するレベルの者が存在する」という命題を出したペロームという精神科医がいた。ただし、ペロームはセガンに対して批判的に「白痴が社会化するというのはばかげた考えだ」と批判していることは、付け加えておきたい。

なお、セガンがただ一カ所だけ用いている right 概念（'The right of all to education'、『白痴症。および生理学的方法によるその療育（1966 年著書）』序論）に対し、大方のセガン研究者は、定石通り、「権利」との訳語を当てて理解しているが、ぼくは、時代状況やセガンの論理から言って（セガンのフランス時代—1850 年まで—を舞台とする前提の語り）、われわれが一般に理解している「権利」とすることは困難であり、方向付けを意味する「正当性」とすべきだとの考える。すなわちセガンは、「すべての人の教育への権利」を提唱したのではなく、「すべての人の教育への正当な道〔可能性〕」が開かれたことを論じたのであった。

セガン研究を進めていて、セガン研究の先人の業績につねにイライラ感が付きまわっていた。そのイライラ感の大元がまさにぼく自身にあったことに気づいたのが、19 世紀初中

期のフランスにおける教育の課題は「文明化」（つまり「社会化」）にあったのであり、「発達＝文化化」それ自体が絶対的価値ではなかった、ということだ。この点で強く自己批判をしなければならないが、清水寛氏から絶賛の榮譽をいただいた初のセガン研究論文「19世紀初頭における二つの perfectibilité についての研究序論－教育における「文明化」と「文化化」」（学習院大学文学部『研究年報』第 52 輯）のセガン評価の本質的誤りである。セガンは「発達」という言葉を多用しているけれど、それは「社会化」のためである、というのが彼の立脚するところである。

かのイタルの「アヴェロンの野生児」実践で、「その子の発達はその子自身と比較されるべきである」という「現代的な感動話」も提出されているが、それで「野生児は人間になった」とはみなされたわけではない。イタルの直接な実験・観察の手を離れてからも、常に監視と保護が必要なように、イタル実践の舞台(パリ聾啞学校)のほど近くの旧女子修道院に保護観察人と一緒に住まわされたのではないか。しかも聾啞学校の管理委員会から、「彼を人目に付けることのないように」との厳命が言い渡されている。セガンはそれを「アヴェロンの野生児は、とどのつまり、救済院に捨てられた、そして哀れな最期を遂げた」と評している。セガンはヴィクトールを人間化＝社会化のための教育に失敗した、とみなしたのである。

それまでのぼくのセガン研究は、先行研究によってトレースされたセガン像に振り回され、先行研究の瑕疵探しで夢中であったと言える。かくしてぼくは、先行研究のセガン理解に対して実証的批判を加え、かつ新しいセガン像構築のために、ぼくの、本物の「歴史探し」の旅を始めることになった。セガンを素材にして 19 世紀初頭から中期のフランスの旅をする。要は、あたりまえの研究方法、セガンの存在証明（レゾン・デートル）を確認し、それを入手し、分析・総合して、論理的ストーリーを構築する、ということだ。2008 年以降のことである。

2008 年 9 月 2 日、かの有名なパリ 4 区ボージュール広場を通り抜けたところにあるフランス国旗が掲げられた建物の前に、ぼくは立った。そこには、セガンのフランス時代の白痴教育の「あらゆる存在証明」が眠っているはずである。世界中のセガン研究者がほとんど足を踏み入っていないのではないと思われる機関である。もちろん、日本人セガン研究者は誰一人として訪問した状況証拠は見られない。入り口の横に金色に光る小さなプレートがあり、ARCHIVES DE L'AP-HP とある。「パリ社会扶助・医療古文書館」。案内も何もない。カウンターにいた 40 ほどの男性が目線をこちらによこし、語り掛けてくる。

「児童病院入退院死亡者の調査か？ネッカー（児童病院名）から電話で調査依頼が来ている。日本人がそっちに行くから協力頼む、と。」

「そうです。それとエドゥアール・セガンに関する史料を探しています。」

「ネッカーの方は創設以来の児童名簿、入・退院・死亡者別でマイクロフィルム化されて

いるから、今準備するから、自分で検索して。セガンの方は、まあ絶望的だと思った方がいいよ。ただ、セガンが関係していればの話だが、審議録があるから、それで見つけなさい。何年ごろ？」

ぼくは古書店で入手し帯同していった『救済院総評議会コード集』（1816年版、略称）を取り出し、「このコードに従っていた時代です。1830年代後半から1840年代前半。」と答えた。係員がウインクしながらカウンターから姿を消した。こうして、セガンの白痴教育関係史料「救済院操業議会決定」書数点と初めて出会うことができたのだった。この公文書によって、先行研究がセガンの処遇をきわめて厚遇であったとしてきたことは、まったく虚構であったことが証明された。なお、これらの公文書に関する詳しい情報は、一部は2010年上梓の『<sup>イデオ</sup>知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究』（新日本出版社）に叙述資料として掲載したが、詳しい文書名等は、セガンの生育を証明する公文書情報と併せて、「[研究ノート] 旅路—オネジム＝エドゥアール・セガン その生誕からフランスを去るまでの光景」（日本セガン研究会『セガン研究報』第8号、セガン生誕200周年記念号、2012年1月20日編集発行）に綴った。

AP-HP 古文書館での史料調査は、フランス革命期から19世紀前半の救済院・施療院等の行政管理機関での管理委員会審議録を対象とした。もしセガンが書いていることが正しいなら、この審議録にそのことが記録として残されていなければならない。もっとも中心的な調査課題は以下のことである。

☆セガンは自らを「白痴の教師」として採用してほしいと申し出て、その結果を得たこと。研究史上ではセガンのこの主体性は描かれず、行政側によって招聘された、招待された、とされている。

結果的に言えば、ぼくが「仮説」的に言ってきたことが史料的に確認され、これまでの研究が「でたらめ」であったということが判明した。なんで、そんな「でたらめ」がこれまで通用してきたのか。その検討はどうしても必要になってくる。

セガンが知的障害教育の開拓の道に進んだのは、名だたるセガン研究者の言を総合してみると、優れた医学博士の家系に生まれたこと、両親のルソー主義に基づく養育方針の下で育ったこと、優れた学校教育を受けたこと、医学部に進んで著名な進歩的な精神医学者の薫陶を受け非常に秀でていたこと、そのことによってある精神医学者から一人の生徒の教育を委託されたこと、青年期に入って人権に目覚めたこと、それでサン・シモン主義派の仲間に入り当時の思想的に先進的な人々と交わりを深めたこと、それらがセガンをして白痴も人間として教育を受ける権利を有するという立場をとらせたこと、などなど、さま

ざまなセガン評が錯綜しながらも、結局は、「予定調和」的にセガンの知的障害教育への道を説明するのが、世界的な一とくに我が国に支配的なセガン論だった。

サン・シモン主義とのかかわりがあったということを除いては、どれもこれも、セガンの口からは語られていないし〔晩年の「幼少期回想記」もどきものは別〕、当時の文献史料で直接示すものは見つからない。職場から 2009 年度に一年間の国内外研修が認められたことで、これを最後の機会と思ひなし、セガンのフランス時代の成育史、活動史を、当時の公文書発掘によって、組み立てなおしてみようと決意した。セガンの生まれ、育った〔とみなされてきた〕クラムシー、中等教育の学びの場〔とみなされてきた〕オセール、そしてパリに出て学びの場としたという医学部在籍証明等々。

2009 年 6 月、それまでも数度訪問はしていたクラムシー、オセール、そして新たにセガンの父親の生誕の地ヨンヌ県クーランジュ・コミューン、その他を加え（そのほかに、偶然の機会を得て、国立パリ医学史博物館—これは「セガン教具」の実物「発見」という驚天動地の出来事を生んだ—、今度は明確に、行政上の史料（公文書）発掘を目的として訪ねた。各コミューンの公文書館（市役所戸籍係）、あるいは県古文書館、国立パリ古文書館などが非常に好意的に協力してくれ、目的の史料収集がかなった。「なんだ、こんなことなら、もっと早く手を着けるべきだった」という反省は、どんな時にでもするものなのだが、このときほど痛感したことはない。そして、セガン研究の先輩たちが全く手に付けていないことが確認され、非常に疑問を持ったことを併せ記しておく。目的の事後処理すなわち論理再構成も、これまでの世界のセガン研究到達を、実証的に、いとも簡単に覆すものとなった。

簡単に言えば、「医学博士セガン家は父親当代一代限り」であり、「セガン家の子育てはヨーロッパ・フランスの近世から近代初頭の上中流階級のそれと全く同じ」であり、「受けた中等教育は、上・中流子弟用の全寮制の『監獄』と称されるコレージュであり、近代知とは無縁の古典主義で超エリート養成を目的」とするものであった。ありていにいえば、わが国のセガン成育史言及者らが好んで言うところの、ルソーも民主的な教育も人権も存在せず、あるのは、ただただ、近世の色が濃いヨーロッパ・フランスの貴族・ブルジョア階級の男児・男子教育の伝統に則って、セガンは育まれていた、ということである。

セガンは伝統と格式のある二つのコレージュに在籍したが、どのグランゼコールにもパリ医学部にも進んでおらず、実務法律家を育てるか中間役人、あるいは今日でいうサラリーマンを養成するパリ法学部に進んでおり、しかも全課程を修了した形跡がない、ということであった。セガンを「予知調和」でその人生史を捉えることの愚を痛感させられた調査行であった。

2009年のサバティカルの期間に、これまでの自身の研究課題を整理しなおし、収集した史料を基に、「論文もどき」を綴った。原稿の表題は「孤立から社会化へー白痴教育の開拓者セガン」。付けた注には詳細にわたる先行研究に対する実証的批判を書き込んだ。「もどき」としたのは本文に研究課題（いわゆる仮説）を明記しなかったからである。当然のことながら、出版を前提とした。

出版は、最終的に、清水寛氏の大きなお力添えを得て新日本出版社が引き受けてくれた。だが、編集者から、主題と副題とを入れ替えて、障害児教育分野がメインの研究だとして、との提案がなされた。それはぼくの執筆意図とは全く異なる提案であったため、自費出版に方向転換しようか、それとも公刊を断念するか、悩みに悩んだ。ぼくにとっては副題は素材であって主題こそが、青年期からこだわってきた人生論的問いであり、その問いに一つの命題を見出すために「うゝあがぼん」を続けてきたのであるし、素材セガンで一定の「落とし前」をつけることができたのだから。しかし、仲介に入ってくださった清水寛氏のご厚情を足蹴にするようなことはしてはならないと思なおし、編集者の申し出を受け、脚注一切を削除し、出版準備が整った。

2010年春、無事、書店の棚に並び、書評もいただき始めた。ぼくが長年所属してきた日本生活教育連盟編集『生活教育』誌に掲載された書評もどきを除き、書評はおおむね好意的ではあった。とくに、第2章の、セガンがサン・シモン主義者として具体的な社会活動をしていたという史実の叙述は、「サン・シモン主義」に対する日本社会の一般理解を超えるものであったことを始め、セガンの社会運動家・活動家としての実像の提示であり、同時に白痴たちをその主権者とみなしていることも、「白痴にも人権があるとみなしたから白痴教育を手掛け、そして成功した」という論を張っている人々、とりわけ清水寛氏をして、「本書の白眉である」と言わしめている（『しんぶん赤旗』2010年5月9日号書評欄「前半生を実証的に究明した労作」）。

この書評を読んで力が抜けた。セガン研究開拓者たちへのメッセージは何も届いていないのだ。「予定調和」的に説明する「セガンの白痴教育開拓」という彼らの目線を変えようとする読み方を微塵もしていない。

恵まれた環境で矛盾なく育ち、親から受け継いだ素養で知性を培い、それが故、偉大な人に見いだされ、誰もすることのなかった白痴学校を若くして大病院の中に独力で創設し、厳しい男女別世界が構築されているにもかかわらず女性収容の大施設の中で男子青少年(10歳から19歳)の教育に携わるよう国家から要請された...

これがセガン研究の常識的到達として語り継がれてきたわけだ。嘘八百！それは違うんではないですか、セガンの自己内外の諸矛盾を切り開こうとする「自発性・主体性」という

視点で、セガンを捉えなおしてみると、養育環境観から、学習歴観から、言葉だけの「サン・シモン主義者として白痴の待遇改善」観から、何から何まで洗いなおさなければならぬのではないのですか？

ぼくがこだわり続けてきた「青年期をどう生きるか」という問いは、まったく無視されたと感じた。大いに好意的な書評であることが分かっているだけに、ぼく自身が直接的に投げかけた、セガン研究者たちに対するメッセージが届いていないということの現実、自分の力量の無さも痛感した。どなたかが、書面で以て、「正規の学びをしていない者の言うことに耳を傾けることはありません。」(障害児教育専門分野の研究者じゃない、さらには学位を持っていない)とご親切をくださったとおりに、「うゝあがぼん」はアカディミズム世界では存在しないと同一ことなのだ、と痛感した。

それはともかく、セガンの正式の、つまり戸籍上の名前はオネジム=エドゥアール・セガン。しかし、公文書以外で記録の残っている 1830 年 (18 歳) 以降、彼がこのフルネームを自らの意思で使用している跡はない。ファーストネームの前綴りを欠落させてエドゥアール・セガンが社会に知られている。欠落させているオネジムというのは父親のファーストネームの後綴りだ。なぜセガンはそういう意思を持ち行使し続けたのか。それが、ぼくがセガンに自らの意思を持って急接近していった「因子」である。2005 年 7 月の清水寛氏の出版と学会賞受賞を祝う会の準備会でその旨を語っている。そして、それを探究し続け、一つの回答を得たのが 2010 年 3 月刊行の拙著であった。さて・・・。

## 幕を下ろそう

拙著が刊行なって 1 年半ほど後に、『フランス教育学会紀要』第 23 号が手許に届いた。開いてみると、思いもよらず拙著にたいする書評 (研究批評) が 3 ページにもわたって掲載されていた。筆者は前北海道教育大学教授・藤井力夫氏。セガンの初期実践をターゲットにして非常に緻密な研究をしておられ、ぼくは世界最高峰のセガン研究者だと理解していた。が、まったくと言っていいほど、面識も交流もないお方だ。

ぼくの研究の手続きをきちんと捉え (「第一級資料の発掘調査により」)、研究の到達を過分におほめくださっている (「... (セガンにかかわる) これらの研究、とくにフランス時代のそれは、大きく飛躍された。関係する者の一人として恥じ入るばかりである。」)。が、次の段落に綴られていたことに、言葉を失うほどの、驚きと喜びを覚えた。

「生活綴方研究で知られる著者が、なぜこうした研究に接近しえたのか。・・・日本の生活綴方教師の実践に深くこころを寄せてきたことだからこそ実現できたと考え。・・・セガンという一青年教師の歩み、その必然性を明確にさせないではおけない、



日本の綴り方教育・一研究者の凄さを感じるのである。」

ところで、藤井氏は先の書評の中で、ぼくのセガン研究が国際的に高く評価されよう、と書いておられる。2012年10月27日、28日の両日、セガン生誕の地クラムシーにおいて、「セガン生誕 200周年記念シンポジウム」が開催された。主催者クラムシー・コミュニケーション科学芸術協会からの要請を受けて、日本とセガンとの関係性について報告をした。ぼくが、セガンについてどんな研究をしたかではなく、日本近代教育・福祉史においてエドゥアール・セガンがどのように取り入れられ、位置づけられ、実践され、研究されてきたか、という内容であった。報告に対しては好意的に受け止められ、一部の人からスタンディング・オベーションをいただいた。それはぼくに対して贈られたものではなく、わが日本においてセガンが極めて早い時期から評価され、理論的実践的に取り入れられた、という事実に対してであった。

ただ、シンポジウムの基調となるセガン半生史を報告した児童医学者（医学博士、パリ在住）ジャン・マルタン氏が、その報告の中で、ぼくの研究を取り上げ、「これまで言及されることのなかった極めて重要な史料発掘と史実指摘とを川口がしている。少なくともフランス時代のセガンに関しては、ほぼその全容が明らかにされた。」と、幾力所かにわかって触れていたことで、ぼくの研究が有意であることを知ることができた。望外の喜びであった。そして誇りを持つことができた。

### セガンの教育論の一端の研究的解明へ—今後のセガン研究のために

「同じ教育を受けてもみんなが同じになることが無い。それは自発性が現れるからだ。」という趣旨をセガンは1843年の論文「白痴の衛生と教育」に書いている。そして「自発性」をどう引き出すかの実践的課題を提起している。かたくなに自己の殻にこもり続ける白痴に対して、その殻を自らが破る(=自らが主催する「祭り」、すなわち、「自分こわし」と「自分づくり」)ことで白痴症状を緩和していく、社会に出ても共同していける、と。

その一文はセガンが(それは同時に、ぼく自身でもあるのだが)経験した人生の神聖な営みと重ねているのだろう。セガンの場合には、固く彼を囲い込んでいた近世的な因習という殻の隙間から、1830年革命に飛び込み戦果を挙げたことで国王(ルイ・フィリップ立憲王)から褒章を受け、自分のファーストネームから、父親のファーストネームの後綴り「オネジム」を欠落させる人生を選び取った。

では白痴にはどう「祭り」を仕掛けるか、である。その先行事例はない。とにかく、社会的弱者を「社会化する」などという思想そのものが全く成熟していない時代社会である。

セガンは下記のように、問い、道を開こうと決意する。

‘Can idiots be educated, treated, improved, cured? To put the question was to solve it.’ 「白痴は教育されうるか、療育されいるか、向上されうるか、治療されうるか？これらの問いは〔自らが〕解かねばならなかった。」（『1866年著書』）

ぼくは、これこそがセガンの白痴教育のもっとも意義ある到達なのではないかと思っている。「問い」を持ち、「祭り」を仕掛け、白痴たちに「自発性」を引き出させる、一人の子どもに可能ならば他の子どもにも可能でなければならない。これを実践し実証するために、その可能な場・機会を求めて、セガンは、教育大臣や内務大臣、科学アカデミーなどに請願をし続けた。つまり彼は決して「招待された」のではない。

最後に、何故にわが国のセガン研究が誤謬に満たされ続けてきたのかといえ、すでに触れたことだが、史料的検証がなされてこなかったということであるが、根本的なところを言えば、後掲に附した藤井力夫氏が拙著に対する書評の中で言及しておられることを斟酌すれば、セガンがセガンとして読まれ、綴られてこなかったということにこそある、というべきだろう。

同時に忘れてはならないのは、セガンは敬虔なプロテスタント・クリスチャンであったということだ。「白痴は神の戒律を犯したことの結果現象だ」というのがこの時代までの一般的な認識・行動であった。セガンはそれに対して、あらゆる人間は神の下の平等的存在である、という立場をサン＝シモン哲学に学ぶことによって選び、人の教育可能性を白痴にも当てはめ、それぞれに早い、遅い、単純、複雑などという筋道はあるとしても、教育は可能であるという立場を貫いた。まさに「道は遠くとも」というわが国の知的障害教育・福祉の先人たちのメッセージの先駆的实践の道を選んでいるのである。

なお、セガンが自発性の発露を精神医学の世界との戦いで存分に発揮したことを、知的障害教育の専門的自立の問題として綴ったのが、2014年2月末に幻戯書房から出していた『一九世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミューン』です(第一部)。また、そうした白痴教育実践の体系書とも呼べるものが「白痴の衛生と教育」(1843年)という論文ですが、これは『草稿 知的障害教育論／白痴の衛生と教育』との表題で幻戯書房から翻訳出版をいたしました(2016年)。

ぼくのセガン研究を『私の中の囚人』(1982年)と同じ主題だと看破してくださった知友がいる。方法論を戦前生活綴方史研究とつなげて捉えてくださった研究者もいらっしゃる。従来のアカデミズムに反発して出発した我が研究者人生が帰結するところもそれと同じであったことを読み取ってくださる方がいることを知り、望外の喜びをいただ

きました。まことにありがたいことだと感謝しております。

まだまだ「問い」を探し出し「問い」続ける人生でありたいと思います。大学という組織的な教育の場からは離れましたが、「人生」という大きな教育〔学習〕の場で「問い」続けていきます。これからもご同伴いただければこの上ない幸せです。

#### [附] 藤井力夫氏による書評全文

川口幸宏著

『知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究』新日本出版社 2010年

『一九世紀フランスにおける教育のための戦い—セガン、パリ・コミュニケーション』幻戯書房 2014年

評者 藤井力夫<sup>1</sup>

戦後でみても、私たちの先人は、「この子らを世の光に」（糸賀一雄）とか、「道は遠けれど」（近藤益雄）、あるいは「胸ふつつつ」（青木達雄）、「逆風に帆をあげて」（与謝の海養護学校）と謳ってきた。本当のところを実現するためにこころの内から滲み出た戦いのうた、そう解することができる。誰もが落ちこぼれなくということを追求するほどに、形式的に済まそうとする壁に突き当たる。どう覚悟を決めるべきか悩んでいる人も多いことと思う。ここに紹介する二著作は、こうした悩みを、近代市民社会の成立時に立ち戻って考えることができるという機会を提供してくれる。戦前日本における生活綴方教育運動の発掘調査研究に携わってきた著者だからできた第一級の研究である。日本でのそれを、近代公教育の発祥の地、フランスで実施し、パリ・コミュニケーション下の世俗性教育に向けての戦いや、知的障害児教育の開拓者、オネジム＝エデュアル・セガン（Onésime-Édouard Séguin, 1812-1880）の苦闘を浮き彫りにしたのであった。2012年10月、フランス・クラムシーで開催されたセガン生誕200年シンポジウムを鑑みても、著者における研究の到達段階は、最先端を行くものと推察される。二著の内、2010年著作については、別のところで既述した（『フランス教育学会紀要』23号、121-124、2011年）。ここでは、二著作における優位性について、学んだところをいくつか記してみたい。

#### 1) 「当事史料と直接対面することによって、当時の実像を知ろうとする立場を強固に持った」

これが著者あとがきにある基本姿勢で、セガンの生地、ヨヌヌ県立古文書館はじめ、コレージュ学簿、国立図書館、パリ医療福祉古文書館、パリ市歴史博物館などを訪ね、第一級の当事諸史料を発掘させた。叙述は章立てごとに緻密で淀みない。各部巻末には、例証ともいえる原資料が翻訳

<sup>1</sup>ふじい りきお

元北海道教育大学教授、元札幌三和福祉会三和通所施設長

付記されている。読み手には原資料で再構成できる。

a) 2010年著作：知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究 翻訳資料、子息の教育についてのO氏への助言(1839)。

b) 2014年著作：19世紀フランスにおける教育のための戦い—セガン、パリ・コミューン。／第一部 白痴教育教師の誕生 原資料翻訳、白痴たちの治療と訓練の起源(1856)。／第二部 パリ・コミューンと近代教育の構想 原資料翻訳、パリ・コミューン下の子どもたちの状況 裁判調査資料より

2) 「創意くふうのある教育活動の発生」 これは、著者が1980年の著作『生活綴方研究』（白石書店）のなかで「教育実践の歴史性」について言及した一節である。創意あるところを跡付けるとすれば「当事史料」が重要となる。さらなる発展、それがパリ・コミューンやセガンの研究へと向かわせ、「当事史料」を発掘させた。1986年の著作『教師像の探究 子どもと生きる教師像の創造』（教育史料出版会）とともに読んでいただくことをお勧めしたい。「特別支援における教師像の探求」．どう持つか。考えるところを胸に歴史と対話する。さすれば学ぶところが多いに違いない。

3) 「孤立」から「社会化」へ。これは2010年著作の副題である。近代市民社会における障害児教育の開始をここに見いだしたことが、著者をして明解に諸関係を分析、叙述させたものと考えられる。アヴェロン野生児、ヴィクトールの教育可能性をめぐって、イタル(J.-M.-G. Itard)はピネル(P. Pinel)の見解に与せず、救済院ではなく、豊唾学校での実践を試みた。後継のエスキロール(E. Esquirol)は、1818年、知的障害を状態像と理解し、孤立状態にあると定義する。生来的な「孤立」は外界に立ち向かうことなく、市民として発達する可能性はないと理解する。しかし近代市民社会のなかでの「孤立」は、立ち向かう機会が保障されてのことで、教育なくして不可能とはいえない。乳幼児における可能性は、値踏みできるほど安価ではない。セガンは、1838年、イタルの導きのもとにこの課題に挑戦したのであった。

4) どのように挑戦していったのか、セガン自身による整理が、2014年版・第一部・原資料翻訳(1856年6月)として付記されている。アメリカに渡って6年、最初の実践から17年目の覚え書きである。訳文は、原文に忠実で、セガンの記述を日本語で読み取ることができる。残念ながらこれまでのセガン翻訳本にはなかったこと。なお、本論文は、コネチカット州・知能障害者実態調査委員会報告(1856年5月)にも掲載され、アメリカにおける知能障害児学校の開設運動に貢献した。1850年代以前と以降、そして現在、三面から翻訳文の行間を味わうことができる。

5) セガンは上記論文で、当初たてた「哲学的原理」をとにかく実践的に削ぎ落としたと記している。では、元になった哲学的原理とは何だったのか。「孤立」を抜け出す鍵概念でもあるので補足しておきたい。それは、対象児における「自我」と「非我」の関係で、当初は未熟。目で捉えたも

のが「非我」で、それをどうしたいのかが「自我」。面白そうだなとか、何だろうと思った時にはじめて「非我」となり、どうしたいのかで「自我」が育つとする。この意味で模倣が大事であり、対峙できる身体軸が形成されなければならないとする。食欲の赴くままにしか行動できない子どもたち。日常の生活場面でどうしたいのか、行為を組織する実践こそが課題で、患者を何百人も診る仕事、医師が重要なのではない。教師こそが求められるとする。

6) 青年セガンにおいて、**知的障害児教育に携わる必然性**はどのように準備されていたのか。著者による実地踏査はこれへの接近を可能にさせた。1830年七月革命時、セガンは18歳で、王立特級コレージュ・サン＝ルイの数学特別進学クラスに在籍。成績も優秀。革命に功労があったとして、同年12月3日勅令により褒賞を授与。理数系の国家リーダー養成校の準備課程に在籍し、社会の矛盾には、演説でもって立ち上がることができる人物。そんな一面が調査されている。その後の経緯含め、著書を読まれたい。他方、ユゴー（Victor Hugo）は、この時28歳、市街戦に参加することはなかったが、同年9月から『ノートル＝ダム・ド・パリ』の執筆に集中したとのことである。興味深い。

7) ここで、挿絵を二つ。いずれもユゴー著。一つは『レ・ミゼラブル』第三部・マリウスの口絵。他は、『ノートル＝ダム・ド・パリ』第4編1の挿絵。前者は、パリにおける捨子記述の冒頭部。七月革命を描いたドラクロアの「民衆を率いる自由の女神」中央部を使用。右側の銃を持っている少年が「ガヴロッシュ」で、捨子。浮浪児の代表。後者は、作中・



1467年のある朝、寺院玄関前に捨てられた乳

児を教会婦人部の人たちが見ている図。司教補佐・フロロにより「鐘突き」として養育。拾われた日にちなみ「カジモド」（復活節第二主日）と命名。ところで、1841年、セガンが救済院で対象とした知的障害児11名の内、少なくとも6名は孤児や捨子。「ガヴロッシュ」や「カジモド」には、その奥に、知的障害の子どもたちが存在していたのである。捨子の内、3分の2は、生後1ヶ月以内に死亡。知的障害児とは生命力を持った子どもということになる。

8) 「カジモドの眼」。文芸作品における「非我」の抽出。著者は、ユゴーが8歳前後の時、住んでいた近くの庭園で、ゲラン夫人に連れられたアヴェロン人のヴィクトールと遭遇した可能性を推測し、その例証を試みている。前記の「カジモド」もその一例と言えよう。脊柱彎曲で、ゆがんだ顔の一つ目、聴覚も鐘音で障害。そんな彼が何を見、どう思い描いているのか。「カジモドの眼」を通じ、彼の「非我」を描出、文学作品とした。セガンが、託された子どもを前に、彼の「非我」を想定し行為を

引き出す場面を設定しようとしたとしても、何の飛躍もない。1820年代、両眼視機能の解剖学が進み、後に斜視手術も準備。盲学校では生徒ブライユ（Louis Braille）が点字を開発。6点構成による蝕読方略を完成。子どもたちの眼が、何を見つけどう感じているのか。「非我」への想像が障害児教育創始の出発点であった。

9) 救済院での上司、医師ヴォアザン（Félix Voisin）との対立は、てんかん児をめぐる問題だけではない。職業教育をも視野に入れたセガンにおける条件整備への要求が背景にあったものと考えられる。著者の実地調査による大発見。1848年二月革命時の「労働者権利クラブ」のアピールは、労働を通じての自己実現という課題も視野に入れられている。同年11月4日共和国憲法第13条では、無償義務教育と職業教育を結びつけ、労働を通じての自己実現も目指す規定となっている。これは社会権規定の最初の一つで、働けない場合は家族が養うことを前提に、救済される権利があるとす。セガンの取り組みが社会権規定に貢献していたことを示す一例であろう。ただし、整備の任にあった人たちや、推進すべきヴォアザンたち医学界は、「教育」を目指すよりも、まずは救済さえできればよいとする立場であった。セガンからすれば、救済という名の障害の「固疾」が進行するのであった。

10) 最後に、2014年著作・第二部について。前記・「カジモド」は中世後期の作中人物であった。彼はフロロにより生命を得たが、教会の中での閉じられた生活であった。近代公教育における「世俗性」は、摂理を離れ、市民として労働者としての教養を形成することを原則とする。ところが、無償制や義務制に比べ後回しで、1850年ファロウ法（Loi Falloux）でも、「教育の自由」の名のもと宗教者の教育介入が合理化されるのであった。これに対し、ユゴーは立法議会で反対演説する。児童労働に加え、科学から遠ざけられている子どもたちの悲惨を憂え、「教育への権利」を主張する。権力の中枢にいたティエール（Adolphe Thiers）との確執も興味深い。その後どのように展開され、1871年のパリ・コミューンではどのような人たちが立ち上がったのか、その実相が解明される。著書を読みたい。巻末の「研究のための史料素描」、原資料翻訳、立ち上がった浮浪児たちの「裁判記録」は、これまでの理解を書き改めてくれるであろう。

(出典：全国障害者問題研究会『障害者問題研究』第43巻第4号、2016年2月25日)